

# 愛媛大学医学部 同窓会会報

2016 NOVEMBER No.32

発行日／平成28年11月1日

編集発行人／高田 清式

発行／愛媛大学医学部同窓会  
〒791-0295

愛媛県東温市志津川

TEL(089)960-5989

印刷／原印刷株式会社

TEL(089)974-8711



## 表紙紹介

### 愛媛大学医学部管理棟

平成28年3月改修

耐震面の強化を図り、災害対策本部となる施設や、医療  
資機材の備蓄倉庫を整備

## CONTENTS

会長挨拶	2
愛媛大学医学部支援基金について	3
オープンキャンパス開催	3
卒業生からのメッセージ	4
新任教授からのメッセージ	4
愛媛大学医学部同窓会会則	6
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	6
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	7
愛媛大学医学部卒業生にアンケート調査結果	7
第32回通常総会報告	8
海外医療研修に参加して	9
医学祭を終えて	11
同窓会報告	12
支部紹介	14
医学部医学科人事異動	15
お知らせ	16

## 会長挨拶



高田 清式

(昭和56年卒・3期生)

今年度は全国的に類まれなる台風や豪雨が夏から秋に続きましたが皆様お変わりございませんでしょうか。難民受入れ問題、米大統領選挙、わが国近隣諸国との領海・領地問題、リオオリンピック・パラリンピック開催、東京オリンピックの競技場再検討、東京築地・豊洲市場移転、など国内外にも話題の多い年です。医療の分野ではノーベル生理学・医学賞を日本人が今年も受賞したなどの話題もありました。さて昭和48年に創設されたわが愛媛大学医学部は、さらなる発展を目指し43周年目になり、この3月には第38期生が学窓を巣立ち（医師国家試験の今年の合格率は89.2%で国立大学平均91.7%に比し残念ながら昨年同様不振、次回捲土重来を期待）、国内外のそれぞれの医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行っておられます。益々の会員皆さまのご活躍を期待しております。大学の近況としては、教育面では「地域特別枠自己推薦（推薦B）」での平成21年度から導入された奨学生枠の入学者が研修医2年目になり（初期は定員10名、現在は今春から20名）目下初期研修にて研鑽を積んでおります。現在は、昨年同様一般入試65名、推薦A（学校推薦）25名、推薦B20名、学士2年次編入5名の計115名が1学年あたりの定員となっております。このように学生の人数も90人だった時代より増加しており、より一層の医学教育の充実を図る必要性を感じているところです（推薦Bは平成18年度から3年間は奨学金制度はなし）。また、地域医療に従事する医師確保を目的に平成24年4月に開設された地域医療支援センターも（県の委託）軌道に乗りつつありますが、新たに地域医療を担う寄附講座として、昨年地域小児・周産期学講座開設に続き、今年度は西条地区に地域消化器免疫医療学講座、松山地区に地域小児保健医療学講座を

開設いたしました。愛媛大学医学部創設時の大きな使命である地域医療の充実がさらに発展することを期待しています（医学部のホームページ等ご参照願います）。また、国際グローバル化・国際認証に対応するためにさらなる臨床実習の充実等が全国医学部の急務ですが、当大学病院の各診療科とともに県内の各病院での臨床実習も質量の点で昨年度から充実させつつあります（臨床実習後のPCC-OSCEも実施）。また昨年度から韓国の医学生を臨床実習に受け入れていますが、今年度は当医学部からも、韓国、ネパール、米国、ポーランドへ約1～4週間の医学・医療留学を13人の医学生が経験いたしました。また、良き伝統行事になった第6回目の白衣授与式を本年4月28日に全5年生に（臨床実習開始前）厳かに挙行了しました（医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください）。基礎医学分野の教育面では、文部科学省 Good Practice に4年前に採択された当大学の「医学・医療の高度化の基盤を担う基礎研究医の養成」が、今や順調に実行され多数の医学生が研究に切磋琢磨し全国学会や欧文論文掲載で活躍しています（文科省からも全国的に極めて高い評価）。なお、今年度から卒業試験が、国家試験同様のMCQ形式に変わり計400問で11月に1回だけ行う（追試験なし）ことになりました（従来の診療科ごとでなく全科総合問題、全国大学の約7割が今はこの形式）。なお、学生と相談し今年度は全員合格を目指し国家試験対策セミナーを同窓会主催で11月に行う予定です。わが同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も様々な面で頑張る所存ですので何卒宜しく願い申し上げます。また、今回も遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、三浦現病院長とも相談し今年度も会員の皆様に同封し配布いたします。大学病院の近況のご理解にさらに役立てば幸甚です。この激動の年、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

## 愛媛大学医学部支援基金について

医学部支援基金から、同窓生へも寄付募集をお願いしたいとの依頼があり、  
下記内容を掲載いたします。

趣旨にご賛同いただける場合、ご高配をお願い申し上げます。

医学部同窓会長 高田清式

～ご支援のお願い～

愛媛大学医学部は1973年に設立されて以来、高度の医療の普及をめざし医療人の育成に尽くしてきました。これまで、医師を3000名以上輩出し、卒業生は全国各地で医療のリーダーとして活躍するとともに、地域の医療を支えてきています。

他方、2004年に国立大学が法人化して以降、大学の財政は年々厳しくなってきました。優れた教育、研究、医療環境を構築するために、国からの補助金、学費収入、附属病院の医療収入だけでは十分でなく、この度、医療人育成のための環境整備、医学研究の支援、先進医療の推進などを目的に大学医学部内に「愛媛大学医学部支援基金」が創設されました。この基金を利用し、今後医学生や研究者、医療従事者等により優れた教育・研究・医療環境を提供し、さらに医学医療の進歩に尽くしていきたい所存です。同窓生の皆さまにも、この趣旨をご理解いただき、基金へのご寄付を心よりお願い申し上げます。

愛媛大学医学部長 満田憲昭  
愛媛大学医学部附属病院長 三浦裕正

目的・用途：医療人育成のための環境整備、医学研究の支援、先端医療の推進

ご寄付単位：個人1口 1,000円、法人1口 10,000円

寄付方法：①金融機関等にての振り込み、または現金でご寄付いただく場合

医学部研究協力課(TEL 089-960-5944)にお問い合わせください。

専用の振り込み用紙や寄付申込書も用意しております。

②ホームページ内「寄付フォーム」からご寄付いただく場合

愛媛大学医学部支援基金ホームページにアクセスいただき、「寄付を申し込む」からご寄付いただけます。

ホームページ <http://www.m.ehime-u.ac.jp/donation/>

\*税法上の優遇処置もございます

担当窓口：愛媛大学医学部研究協力課

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

TEL 089-960-5944 Fax 089-960-5961

## オープンキャンパス開催

平成28年8月9日(火)、

医学部重信キャンパスにおいて、オープンキャンパスを開催しました。

医学部に興味のある高校生ら総勢397人が参加しました。オープンキャンパスでは、医学科と看護学科に分かれて各学科の紹介や学生生活に関する話の他、入試制度の説明が行われるなど、参加者が知りたいこと・興味のあることに的を絞ったプログラムでした。

医学科では、はじめに、高田泰次医学部長から挨拶があり、医学部に興味があり医学部を目指す参加者に向けて「医師は病気だけを診るのではなく、患者の不安や痛み、患者を取り巻く環境等を含めた全体を診なければなりません。今日の機会を利用して、愛媛大学医学部に興味を持ってもらい、そついった医者を目指して欲しい」とメッセージが送られました。引き続き、学生生活に関する話や入学後のカリキュラム

の話、入学試験に関する説明が行われ、参加者には熱心にメモをとる姿が多く見られました。

その後、医学科での授業時間60分を体験してもらった模擬授業が行われ、講師を担当した総合医学教育センター長の小林直人教授は、参加者からの積極的な質問に対して一つひとつ丁寧に回答・解説を行っていました。

午後からは、各講座での体験実習が行われ、グループに分かれて自分の興味のある分野の研究室を訪問しました。参加者は、病棟や手術室、研究室等を見学した他、シミュレーターを用いた模擬手術体験等を行いました。医学部を目指す参加者にとって、今回のオープンキャンパスも興味深い内容であったと思われます。



(説明会の様子)



(病棟を見学する参加者)



(シミュレーターで手術体験をする参加者)



(麻酔について学ぶ参加者)

## 卒業生からのメッセージ



塚 正彦 (平成3年卒・13期生)

(金沢大学医薬保健研究域医学系 法・社会環境医学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、医学科13期生の塚正彦と申します。平成27年2月1日付けで、金沢大学医薬保健研究域医学系教授の職に就いております。専門は法医学で大学院医薬保健学総合研究科の主任教授をさせて頂き1年半になります。平成3年私は愛媛大学卒業と同時に郷里の石川県に戻り金沢大学大学院医学系研究科病理系に入学、医学博士と病理専門医資格(当時認定医)を1990年代半ばに取得しました。内科医を兼ねながら助手となり、金沢医科大学移籍6年後に職を辞した後、米国カリフォルニア州スクリプス研究所で4年間を過ごし、帰国と同時に専門を法医学に移して今に至ります。金沢大学法医学講座は開講90年を越え、私は第6代目の主任教授ですが、幸い石川県出身者として初めてということで、教授会や学生保護者の会では珍しがられ可愛がられています。地元に戻るかたちで肉親とも近く、地の利を活かす形で、地域法医学を実践していますが、折に触れて思い出するのは愛媛大学で同期の皆様と机を並べたことや、出入りしていた病理学教室や微生物学教室でお世話になった日々です。また農学部のキャンパスも雰囲気良く樽味キャンパスへ通ったことも思い出します。6年間を過ごした愛媛県には今や良い思い出しか残されていません。

石川県に帰っても愛媛大学の皆様にお世話になり続けています。学部学生時代に法医学を教えて下さった四宮孝昭先生は、今でも日本法医学会にお姿を見せ、ご挨拶に伺うと逆に私の写真を撮り次回プリントを手渡して下さいますし、先輩の吉田謙一先生並びに大澤資樹先生は、現役法医学者として遙か先を走り、私の目指すべき道標を残して下さいます。特に大澤先生とは東日本大震災の検視協力の際、宮城県で一緒に目指す御教示を賜りました。死因究明の気運の高まりは、現代社会において必然の流れといえます。雑多な知識を必要とする法医学では無駄なキャリアというものが生じない仕組みになっているようです。法医実務に忙しい毎日ではありますが、ふと周囲に視線を外した際に目に飛び込んでくる、同窓の先生方のご活躍こそが私の仕事の励みです。例えば医学倫理審査委員会で愛媛大学と金沢大学との間で多施設研究が提案されているのを見ると、つい嬉しくなります。母校のことはいつまでも気にかけて想い続けております。今後とも御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 新任教授からのメッセージ



白石 敦

(愛媛大学大学院医学系研究科 眼科学 教授)

平成28年3月1日付けで、眼科学の教授を拝命しました白石敦です。

私は、今治市伯方町生まれで、愛光高校卒業です。昭和61年に日本医科大学を卒業後は日本医科大学第2外科教室に入局し、外科医として研修を積みました。外科認定医(当時)取得後は病理学教室で大腸がんの分子病理学の研究で学位を取得し、米国シンシナティ大学に留学して分子生物学の研究を行ってまいりました。帰国後、平成10年7月に愛媛大学眼科学講座に入局いたしました。

眼科医になるまで、長い回り道をしましたがその間、医師として、人として得難い経験を積むことができました。外科研修時代には、やっとアッペの手術ができるようになった時点で、八丈島の診療所に一人医長で派遣され、産婦人科の先生の前立でアッペやヘルニアの手術をしました。八丈島送りが終わると、日本鯉鮪漁業連組合の診療補給船の船医に派遣され、半年間赤道上の太平洋に浮かんでいました。留学は3年半に及びましたが、その間北米大陸はほぼ車で回り、モーターホームでアメリカを横断して帰国の途につきました。眼科との出会いは、留学中に角膜特異的遺伝子の研究に携わったことがきっかけでした。眼球の表面にある角膜はレンズの働きをしていますが、角膜が透明に維持されているおかげで、我々はものを見ることができるようです。なぜ、角膜は透明に維持されているのか?その魅力に引き込まれるようになり、外科教室、病理教室の誘いを振り切り大橋教授のもとでお世話になることになりました。

眼科学教室のモットーは伝統的に“自由闊達”で、私のような転科組に対しても、all comerの精神で受け入れています。女性医師に対しても、時短勤務や子育てをしながら常勤として手術ができるよう柔軟な体制をとっています。研究・臨床も自由に選択して行うことができます。私は、角膜を専門にしていますが、涙道の専門家でもあります。眼科には白内障(屈折矯正)、緑内障、網膜硝子体、眼形成、神経眼科、涙道など多岐にわたる専門がありますが、教室員は一つまたは複数の領域で、高い専門性を持って臨床・研究を行っています。これからもこの精神を大切にして愛媛の眼科医療に貢献していきたいと考えております。眼科疾患は多岐にわたるため、診療には他分野の先生方との連携が必要になってきます。同窓の先生方には様々な場面でご指導・ご協力をいただくことも多いとは思いますが、今後ともご支援賜りますよう、よろしく願いいたします。



## 雑賀 隆史

(愛媛大学大学院医学系研究科 泌尿器科学 教授)

この度、平成 28 年 6 月 1 日付で、愛媛大学大学院医学系研究科泌尿器科学講座の教授を拝命いたしました雑賀隆史(さいか たかし)と申します。謹んで愛媛大学医学部同窓会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は徳島市で育ち、徳島市立高校卒業後、岡山大学医学部に進学、昭和 63 年に卒業して直ちに岡山大学泌尿器科学教室に入局しました。研修医制度がない時代でしたので、同時に大学院医学研究科に進学いたしました。おもに尿路性器悪性腫瘍の研究に携わらせて頂き、抗癌剤耐性因子の研究で学位を取得しました。1991 年からは Stanford 大学に留学し、臨床腫瘍学について学ばせていただきました。大学院卒業後は香川県内の病院や中国山地の僻地病院などで実臨床に取り組み、1999 年に岡山大学戻って以降は腫瘍免疫学の基盤研究、大学院生指導をおこない、2000 年から Baylor 医科大学で研究をおこなうとともに、日米共同臨床試験に携わりました。帰国後、名古屋大学泌尿器科で腹腔鏡手術を習得し、2003 年からは岡山大学で、後進の研究や手術指導とともに遺伝子治療や癌免疫療法の臨床試験、腹腔鏡手術の普及、密封小線源治療の導入、腎移植の導入さらに手術用ロボット Da Vinci 導入に取り組みました。2011 年からは広島市立広島市民病院に赴任し、Da Vinci 導入をはじめとして臨床技術の向上と指導、そして若手医師のリクルートに精進して参りました。

さて、泌尿器科は外科系診療科であることはもとより、悪性、良性腫瘍、排尿障害、神経疾患、男性不妊症、勃起障害、婦人泌尿器科、腎血管外科、腎移植、尿路感染症、先天奇形、内分泌・代謝疾患、結石症、透析医療などの広い領域における診断、治療、管理、ケアをおこなう総合診療科としての役割はますます増大してきており、最高水準の泌尿器科医療を地域に提供しつつ、新しい医療の展開を目指しています。

さらに全人的な医療に加えて、ロボット手術を例にとるまでもなく、新しい医療の導入にも柔軟であることから、医学生や若手医師にとって非常に魅力的な診療科であると信じています。この泌尿器科の魅力を次世代の人たちに伝え、多くの仲間をつくり、育てていくことを大きな目標にしています。

このような取り組みを進めていくことで、患者さんにも医学生にも、そしてわれわれ医療者もお互いに“出逢えてよかった”とおもえる教室を目指しています。

精一杯尽力させて頂く所存ですので、愛媛大学医学部同窓会会員の諸先生方には、旧来に増してのご支援、ご指導のほどよろしくお願ひいたします。



## 國枝 武治

(愛媛大学大学院医学系研究科 脳神経外科学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、平成 28 年 5 月 1 日付けで、脳神経外科学講座の教授を拝命いたしました國枝武治と申します。

大学入学までは東京で、平成 5 年に京都大学を卒業後、脳神経外科学講座に入局いたしました。その後、滋賀県の天津赤十字病院で研修を行い、平成 8 年より、神経内科の先生が多い脳病態生理学講座において、脳神経外科とは違う環境で大学院の研究生活を送りました。雰囲気も含めて、当初は慣れないことが多くありましたが、諸先輩方の根気強い指導をいただき、研究内容を何とか形にできました。大学院の途中から、米国クリーブランドクリニックに留学する機会を得て、ますます、てんかん病態を始めとする機能外科領域に深い興味を持つようになりました。帰国後は、神戸市立中央市民病院にて多くの臨床経験を積み機会を得て、当時より一分野として確立しつつあった「血管内治療」の経験も積めたのは、大変幸運であったと実感しています。市中病院での施設長経験を得た後、大学帰学して、てんかん病態の研究だけでなく、脳機能に着目した研究を脳腫瘍症例に応用していくことに取組みました。時期を同じくして、覚醒下手術が広く認知され、ガイドライン・施設基準が整うようになりました。その中で、脳内ネットワークの新たな知見を追求して、脳神経外科が脳科学の分野に直接貢献できることを実感して、脳神経外科に進んでよかったと感じています。

ご存知の通り、愛媛大学の脳神経外科学講座は、昭和 52 (1977) 年に初代の松岡健三先生が開講され、平成 3 (1991) 年に榊三郎先生が着任されて基礎的な発展を成し遂げました。时期的にも脳神経外科が診療分野として発展した時期に合致するものと存じます。その後、平成 12 (2000) 年に大西丘倫先生が着任されてから、脳腫瘍の診療と研究を推進され、全国に広く知られるようになりました。この流れを伝承するにとどまらず、自身の強みを活かして、脳の機能に焦点を当てた視点で、より一層発展できるように励んでまいります。特に、若い医師・研修医に、脳神経外科を選んでもよかったと思える教室運営を心がけたいと思います。

愛媛大学同窓会の先生方におかれましては、今後とも暖かいご支援とご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

# 海外医療研修に参加して

## ■ 伊藤 才季(6年生)

(左手前)



今回は韓国江原道春川市にある、江原国立大学校病院の小児病院で二週間の臨床実習を行う機会を頂きました。事前に医療者とは英語で意思疎通をするよう指示を受けておりました。しかし私は帰国子女でもなく、英語をまともに勉強したのは義務教育と大学受験の時のみです。実際に言葉の壁に苦労しましたが、それは「英語が苦手だから」ではなく「韓国語が理解出来ないから」でした。韓国は自国語に翻訳された教科書が無く、英語で医学を勉強します。そのため医療者(医師・医学生)は英語を使うことができます。しかし患者である子ども達やその家族は韓国語のみです。先生方から受動的に英語で患者の疾患や状態を教えてもらうことは出来ても、患者本人と会話して能動的に情報を集めることが出来ません。思うように意思疎通が出来ない場に身を置いて初めて、普段何気なく行っていた患者との会話が重要なものであるかを痛感しました。

患者との言語の壁は有ったものの、病気に苦しむ子どもや、その子を心配する家族の姿は日本と同じものだと知りました。当たり前の様に思えますが、日本のみで臨床実習を行っていたら気付くことは有りませんでした。学生の内に海外の医療現場で勉強するという貴重な機会を与えられたことを感謝するとともに、留学にあたり様々な御配慮を下された先生方に厚くお礼申し上げます。

## ■ 谷口 絵美(6年生)

(左から2番目)



2016年5月、私は韓国のカンウォン大学病院の産婦人科で2週間の臨床実習を行いました。不妊治療や分娩に関する講義、シミュレーターを用いた骨盤内診察の練習、外来でのエコー見学や手術見学等の実習を通して、現地の医学生とともにとても有意義な毎日をおすごしました。先生方と英語でのマンツーマンの講義では自分の医学用語の語彙の少なさを痛感し、疾患の病態や鑑別診断についての質問にうまく答えられずに苦労することが何度もありましたが、どの先生方も図や模型を使いながら私の納得のいくまで丁寧に説明して下さい、興味や知識を深めることができました。また手術見学の際には、愛大病院の手術室では見慣れており、当然だと思っていたことが韓国では異なる場合が多くあり、驚くと同時に新しい観点に気付かされる良いきっかけとなりました。

4月に愛媛大に交換留学生として来日していた2人の医学生と現地で会い、互いに留学先の実習の感想を述べ合ったり意見交換をし、交換留学ならではの醍醐味も味わいました。親切で明るく熱心な先生方や、ユーモアたっぷりで見学しやすい学生をはじめ多くの方々に出会い、恵まれた環境の下で素晴らしい経験をすることができました。今回の留学を通して学び、吸収したことを今後の人生に活かしていけるように今後努めたいと思います。

最後にこの交換留学の実現にあたって、温かいご支援をして下さった全ての方々へ心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## ■ 上野 真梨子(5年生)

(右端)



私は将来の選択と英語の勉強、他大学の医療系学生から刺激を受けることなどを目的として、この春EHC(exploring health care)プログラムに参加して、濃厚な2週間をおすごしてきました。その経験について少し書かせていただきたいです。

プログラム中に頻繁に行われた印象的な活動はディスカッションです。ディスカッションではセクシャルマイノリティや医療制度、医学教育、などの様々なことについて話し合い、また知識を共有しました。ここでは自分の意見やそう思った理由、何がわからないのか、何をしたいのか、など明確に相手に伝えることを求められました。私はこれらを日常では漠然としか考えていなかったことと、このような経験があまり無かったことから、初め慣れるのが大変でしたが、改めて自分と向き合って考えることができましたし、同時に新しく出会うことのできた同世代の他大学やスタンフォード学生の考えている深く論理だった内容には圧倒されました。具体的な活動内容では、セクシャルマイノリティの方への医療サービスを行う施設やAHS(Asian healthcare Services)の見学、アメリカに住む日本人研究者の方のお話など、様々なことがありましたが、記憶に残っている活動はAHSです。AHSとはアジア系移民の人々を対象としたクリニックのことで11もの言語に対応しており、様々な人々が医療を受けに来ていました。一つのクリニックに多種多様な人が集まっていることが驚きでした。今回問診の見学をさせて頂いたのですが、未熟な英語のリスニング力に加え医学的な知識も足りていないために、十分に学べなかったことは悔しかったです。こうしたこのプログラムで生まれた感情が、勉強はもちろん、行動や他多くの面でこれからの私に原動力を与えてくれると思います。

今回のプログラムの申し込みの時点から様々な人にお世話になりました。この場を借りて、関係者の方すべてにお礼を申し上げます。

## ■ 野村 倫子(5年生)

(中央右端)

2016年3月13日から27日までの2週間viaのExploring Health Care(EHC) programに参加しました。臨床実習前ではありましたが、医学的な知識を学び、生理学教室での研究などを経た4年生の春休みに参加したことは、今回の海外研修を非常に有意義なものにしたと感じています。

1週間はサンフランシスコ、次の1週間はスタンフォードに滞在しました。そこでアメリカと日本の医療のさまざまな違いについて知ることができました。

プログラムのone dollar missionでは貧しい人々への支援を学ぶため、1人では決して行かないような場所へ赴き、多くの衝撃と感銘を受けました。また、UCSFの病院見学をしました。アメリカで病院見学をすることは個人ではかなり難しく、貴重な機会を得ることができました。アメリカの医学生生のレベルを目の当たりにし、これからの臨床実習への意気込みを新たにすることができました。さらにスタンフォードの医学生生の考え方も新鮮でした。アメリカと日本とは医学部に進む手順も医学教育制度もかなり違っており、フェローの1人のNeilは4年間エンジニアリングを勉強し、エンジニアとして1年働いたのちに医学部へ進学したそうです。彼は医療機器に関心を持ち、現在も健康管理のアプリ開発などを行っています。機器開発のためには利便性、デザイン性のほかに人々のニーズに合うことが最も重要だという彼の言葉は新鮮でした。私は今まで臨床医か研究者以外に進路を考えたことがありませんでした。しかし、彼のように医学を理解しているからこそ、医療機器の開発をしたり、臓器移植や精神科医療などの環境整備について考えたり、医学教育について考えたり、臨床の場以外にも得た知識を生かすことができると知りました。さらに自らの英語力不足を痛感し、英語がもっとできればもっと有意義な時間を過ごすことができたのに、と何度も感じました。スタンフォードにはベトナムや韓国からアメリカに移住した学生などもおり、彼らも英語の習得には苦労をしたと言っていました。彼らや英語力の高い参加者から英語学習のヒントをもらい、帰国後、英語の勉強を少しずつ進めています。

プログラムの参加者は日本全国の医療に関わる学生で、医学科生以外にも薬学科、看護科の学生も参加していました。医学科生の中にも4年生科から5年生に進まずにMD・PhD制度を利用して大学院に進学する学生もおり、彼らとの交流も非常に興味深かったです。

今回のプログラムを通じて、自らの将来についてより深く考えることができました。また、知りたいことを追求していく姿勢、自分の意見を表現することの重要性を知り、何事にも積極的に取り組んでいこうと決意しました。

今回、このような貴重な機会を頂きましたことを非常に嬉しく思います。応援してくださったすべての方々に感謝申し上げます。また、今回プログラムに参加させていただくにあたり、同窓会からもご支援を頂きました。ありがとうございました。



## ■ 中川 友香梨(4年生)

(左から2番目)

2016年8月、私はMEDプログラムに参加し、24名の日本人医学生、9名の台湾人医学生、6名の中国人医学生と共にスタンフォード大学に3週間滞在しました。臓器移植、セクシャルマイノリティ、ホスピスケア、ホームレス、医療保健制度などに関する講義やパネルディスカッションによってアメリカの医療を学び、日本との違いやそれぞれの良さ、問題点に気づくことができました。また病院も見学させていただきました。アメリカの臨床現場を肌で感じました。さらに臨床英語や身体診察の授業を受け、英語で問診を取り鑑別疾患を考える練習をしました。最終日にはプログラムの集大成として、健康保健問題に関するプレゼンテーションと、模擬患者の問診・診察を行いました。

特に印象に残っているのは、臓器移植ドナーのご家族とレシピエントの方のお話を聴くことができたことです。娘がドナーとなった母親の方は、「娘は誰かの体の中で生きている。とても誇りに思う」といっておっしゃっていました。家族がドナーとなる葛藤や苦悩、レシピエントとして唯一の治療法である移植を待つ辛い現実などをリアルに感じる事ができました。

全ての経験が新鮮かつ刺激的であり自分の視野を広げることができたと思います。そのなかでも、医学生生の参加者たちと過ごした時間が私にとって最も価値がありました。意見を共有することで新たな視点に気づいたり、英語力や意識の高さに鼓舞されたり、日本で学ぶだけでは決して出会うことのできないアジアの仲間に出会うことができました。今後、医学の勉強に励み医師としてのキャリアを築く上で大きな原動力になる研修だったと思います。

このような素晴らしい機会に恵まれたことを大変嬉しく思うと共に、後輩達に伝えていく使命を感じています。最後になりましたが、参加するにあたり指導していただいた諸先生方、支援していただいた同窓会の皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。



## ■ 南 晴菜(2年生)

(左側)

私は2016年の春、スタンフォード医療研修プログラム Culture and Medical Exploration という新しいプログラムに参加しました。このプログラムは今年からの新しいもので、2年生のために用意された内容です。全国の6大学7人の学生が参加しました。CMEという名前の通り、ホスピスや病院への訪問に加えて、科学博物館へ行ったり街を歩いたりなどサンフランシスコの観光もできとても充実した内容でした。

私がCMEを通して最も学んだことは、間違えを恐れずに積極的になることの大切さです。プログラムが始まった頃は自分から発言することに躊躇いを覚えていましたが、それぞれが自分の考えを他者に伝えることで得られるものは想像以上に多く、間違えから生まれるもの、間違えないと思いつかなかったであろうこともあるのだと気がついてからは積極的に議論に参加できるようになりました。また最後には、自分の考えを話すことを楽しいと思えるほどにまで成長できました。

上で述べたことに加えて、全国に医療者を目指す志の高い友達ができただけでなく大きな収穫でした。どの学生のバックグラウンドも私が持っていないような素晴らしいものばかりで良い刺激を受けることができました。一緒に過ごしたのは10日間という短い時間でしたが、お互いに家族のような存在になることができ、とても嬉しかったです。これから5年間の学生生活、そしてその後もこの春の経験を活かして、充実したものにできるよう努力していきたいと思っています。

最後になりますが、今回このプログラムに参加するにあたりご支援下さった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



## ■ 武田 遥奈(2年生)

私は今年の春、2/27～3/7までの10日間、VIAのCMEプログラムというアメリカの文化や医療を体験するプログラムに参加しました。アメリカを訪れたことは初めてで、戸惑うことも多くありましたが、10日間はあっという間に過ぎ、本当に貴重な体験が出来ました。

私たちが行った活動は、医療関係ではホームケアホスピスの訪問、ホスピスで働く方々とのパネルディスカッション、ゲイの方向向けのクリニックの訪問、臓器移植に関する映画鑑賞、Stanford 25というベッドサイドスクリーニングを学ぶワークショップ、PBLチュートリアル教育のワークショップなどです。文化を学ぶ活動では、アメリカの家庭にお邪魔して一緒にご飯を頂いたり、テクノロジー博物館で最先端の技術を学んだり、スタンフォード大学やカリフォルニア大学バークレー校を見学したりしました。勉強だけではなく、off the GRID festivalという様々な国の食べ物が集まる屋台に行ったり、ホテルで部屋に集まって洋画を鑑賞したり、毎日朝にはモーニングの文化を学ぶ、と称してカフェに朝ご飯を食べに行ったりと、楽しい日々を過ごしました。

私が特に心に残ったことは、Power of two という臓器移植に関する映画の鑑賞と、ホームケアホスピスの訪問です。映画は、肺の臓器移植を行った双子が語り手のドキュメンタリーでした。作中で、日本の臓器移植の事情に関する描写が出てきました。心臓移植を受けなければならない日本の子供のご両親が、アメリカで臓器移植を行うために懸命に募金活動をしていました。それを見て語り手の方が、「私たちが想像していたのは臓器移植だ。募金活動ではない」と言っていました。日本では、特に子供の臓器移植のドナーが不足していて、心臓移植などでは海外で手術をする例も少なくありません。しかし、海外での手術費用は高く、作中の親御さんのように募金活動をしている方もいらっしゃいます。この映画を見て、日本でももっと臓器移植の輪が広がってほしいと思いました。また、ホームケアホスピスの訪問では、そこで実際に働いている方が施設を案内して下さいました。二棟の家に、20人ほどの患者さんがいらっしゃいました。庭は広く、手入れが行き届いていて、とても綺麗な空間でした。患者さんの死とどう向き合うか、仕事とそうでない時の気持ちの切り替え方など、私たちの質問に丁寧に答えて下さいました。私はこれまで、「死」について語ることを何となく避けていたのですが、説明してくださった方は、死を一種の次のステップへの一歩と考えているようで、この仕事が出来ると誇りを持っていました。それを見て、私の「死」に関する考え方が変わったような気がしました。

ここには書ききれないほど沢山の貴重な経験が出来ましたし、7名という少人数での参加だったので、強い絆も生まれました。今回の活動を支えて下さったすべての方々から心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



## 医学祭を終えて

第40回愛媛大学医学祭実行委員長 下野 雄大



5月21、22日に第40回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。今回の開催につきましても多くの方々のご協力がありましたので、まずは厚く御礼申し上げます。今年の医学祭も40回目を迎えることとなりましたが、愛媛大学医学部の諸先輩方、教職員の方々、近隣の住民の方々の温かいご声援のおかげであると思っております。

今年の医学祭テーマは「succeed」と致しました。このテーマは「先人たちの思いを医療を学ぶ中で感じとり、医療の益々の発展に繋ぐ」という決意の下、決定致しました。医療という概念が生まれていない頃から人を助

けたいという思いは今も昔も変わりありません。そのような思いが医療の礎となり、今日の現代医療が存在するということが、加えて医療の発展には不可欠であるということを改めて認識し、さらなる発展を担うのは自分たちである、という熱意を込め、記念すべき第40回医学祭に臨みました。

学生の熱意が届いたのででしょうか、当日は5月とは思えぬほどの晴天、暑さとなりました。おかげさまで、多くの方にご来場いただき、各種企画は大盛となりました。講演会では、愛媛大学大学院医学系研究科救急医学分野 相引眞幸教授に「3.11が教えてくれたこと」をご講演いただきました。早5年経ちました東日本大震災当時にDMATとして東北の支援をしたご自身の経験を中心に、他人事ではない災害対策について分かりやすくご講演してくださり、講義室に着席できないほど満員御礼となりました。

その他、「Da-iCE」によるゲストライブをはじめ、サークルバザーやフリーマーケットなど、多くの方楽しんでいただけたと思います。看護科体験ツアー、キャンパスツアーでは将来の医療を担う可能性を秘めた高校生の凛々しい顔、ステージ企画ではこの日のために精一杯練習してきた、部活、サークルの輝かしい姿を見ることができました。

医学祭全体を通して特に大きな問題も起こらず、無事終了することができました。実行委員会だけでは、これだけの大きなイベントを終えることはできなかったと思います。人と人の繋がりを強く感じるとても貴重な機会になりました。来年度以降も医学祭が盛大に開催できるように、後輩たちをサポートしていきたいと思っております。

最後になりましたが、第40回愛媛大学医学祭にご協力くださいました皆様方に、実行委員一同、心より感謝申し上げます。

## 28期生同期会 報告

第28期卒業生の同窓会が、平成28年1月10日に松山市(全日空ホテル)にて開かれました。卒業10年という節目の年であり、参加者は総勢51名(プラス子供もたくさん)と盛況な会になりました。久しぶりの再会ではありましたが、みんな昔と変わっていないなあ、という印象でした。しかしそれでも、会の途中で近況報告を聞きながら、卒業して10年、それぞれ仕事にプライベートにいろいろな経験をしているのだなあ興味深かったです。留学している人や、開業を控えている人、産業医として活躍している人、基礎研究をしている人、それぞれでした。無記名でアンケートも行いましたが、睡眠時間や収入、また仕事への満足度、家庭事情に関してなど、やや突っ込んだ項目もあり、集計後2次会で発表しました。たいへんおもしろい結果となり、大盛り上がりでした。



次回開催は5年後に、という声が多くありました。仕事が忙しく、今回の同窓会に出席できなかった方も多くいましたが、5年後、仕事にプライベートにさらに充実しているみんなとの再会を楽しみにしています。

(文責 幹事 平岡千寛)

## 29期生同期会 報告



平成28年6月11日、料理旅館梅檀にて3回目の同窓会をおこないました。

初回は初期研修終了間際の2年目に、2回目は後期研修終了年にあたる5年目に、そして今回は10年目という節目に集合しました。

地元愛媛で活躍している者から、遠くは北海道からの参加もありました。病院内ではやや中堅どころのポジションになっており、講演や海外留学直後、学会や研究会、日当直等、また臨月や子供が産まれたばかりで残念ながら参加できない人もいましたが、みんなそれぞれの立場で頑張っているんだと改めて嬉しく思いました。

男性11名、女性13名、子供5名で、同級生夫婦3組という、和やかな会となりました。

もう少し外見が変わっているかと思いきや、全然変わっておらず、すぐ学生の頃のように話がはずみ、近況から昔の話にとあちこちで輪ができ、盛り上がっていました。

話は尽きずほとんどの人が二次会にも参加し、最後まで楽しむことができました。そして、またすぐにも同窓会したいという話になりました。次回は3年後? 5年後? にまた再会できることを願って終了となりました。

今回参加してくれたみんなありがとう! 参加できなかった人、次は是非会いましょう!

また愛媛で待ってます。

(文責 向井安奈)

## 10期生同期会 報告

平成28年6月25日、昭和63年度卒業の10期生の同窓会を行いました。昭和最後の卒業生で、卒業してもうすぐ30年になります。9年ぶり2回目の同窓会でした。



同級生数人が南予の仕事で出会い、南予会4~5人の飲み会が始まりだったのですが、次回は松山で企画しようというところから話が盛り上がり、少しずつ参加者が増え、気が付けば30人になっておりました。筑波、横浜、愛知、神戸など県外からもかけつけてくれ、久しぶりのとっっても懐かしい同窓会になりました。50歳を過ぎ、社会的にもプライベートでも忙しい毎日を送っていますが、みんなとてもいい年を重ねていて、いい意味で丸くなっていました。

できるだけ早い時期に、もっと多くの同級生たちと会える機会を企画して、みんなで元気に再会することを約束してお開きにしました。

同窓会のみならず、10期生もみんな元気に頑張っております。今後ともよろしく願いいたします。

(文責 檜垣高史)

## 6期生同期会 報告

平成 28 年 7 月 17 日に名古屋マリオットアソシアホテル 51 階「ジュピター」で、地上 200m から眼下に煌めく名古屋の夜景を眺めながら 6 期生（昭和 59 年卒業）同窓会を行いました。6 期生同窓会は、4 年に 1 回オリンピックの年の夏に行くことに決めていましたので、前回の平成 24 年の松山での会に引き続いての同窓会で、平成 20 年の東京に次ぐ松山外での開催です。24 名の参加があり、松山外での開催ということもあり、家族で名古屋に来た同期生もいたようです。名古屋市立大学大学院医学研究科耳鼻神経感覚医学教室教授で名古屋市立大学病院副病院長の 2 期生村上信五先生も参加してください、シャンパン、CD（名古屋市立大学医学部卒業のジャズミュージシャン）の差し入れがありました。母校愛媛大学医学部の麻酔科教授に就任した萬家俊博先生の祝賀会を平成 27 年 6 月に開催して以来の大きな集まりです。なつかしい顔がいっぱいで、30 年以上時間が逆戻りしたのを感じました。スライド写真を使って参加者全員に近況報告をしてもらいましたが、独立した子供のことを紹介する参加者がいたのも私たちの年齢のせいでしょうか？もうすぐ、孫の話で盛り上がりそうです。二次会では、名古屋マリオットアソシアホテル 52 階のスカイラウンジ「ジーニス」で、現在の仕事のこと、家族のこと、将来のことなど、夜遅くまで語り合いました。気の置けない仲間との語らいは時間を忘れます。会の開催に尽力してくれた方々に感謝します。



次回は、平成 32 年東京オリンピックの年に愛媛で開催予定です。全員が 60 歳以上です。どんな同期生に会えるか今から楽しみです、それまでみんなが元気であることを心から願っています。

（文責 向田隆通）

## 8期生同期会 報告



第 8 回愛媛大学医学部 8 期生同窓会を平成 28 年 7 月 23 日にネストホテル松山で行いました。

本会は昭和 55 年（1980 年）入学生または昭和 61 年（1986 年）卒業生の集まりで、原則として毎年 7 月に開催されています。

今回で 8 回目になりました。参加人数が少ない回もありますが、今回は卒業後ちょうど 30 年ということもあってか 20 人が集まりました。

その中には本当に卒業以来 30 年ぶりに顔を見る者もいて、これまでの人生を大いに語り合いました。

皆それぞれの専門分野で活躍しているのですが、その基礎はやはり愛媛大学キャンパスであり、遠く離れている者も松山市や重信町を懐かしく思い出しました。

これからもお互いに元気で頑張ろうと励まし合い、そして母校のますますの発展を祈念した次第です。

会長 金澤慶治

（文責 東野博）

## ♪ 楽器類のご寄付のお願い ♪

同窓会会員の皆様には、日頃より学生の課外活動について、ご協力いただきありがとうございます。医学部音楽系サークルでは活動にあたり、楽器類が不足しており、十分な活動が困難なことがあります。もし、ご家庭で不要の中古楽器等をお持ちでしたら、ご寄付または拝借できれば大変ありがたく存じます。

吹奏楽部（木管、金管楽器等）、室内合奏団（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス等）、邦楽部（17.13 弦の琴、立琴台等）の楽器類が不足しております。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

連絡先：学務課学生生活 TEL 089-960-5177 FAX 089-960-5133 または 同窓会事務局

## 第14回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

平成28年1月23日、今回は14期生の野口先生と秦先生が幹事担当で、アルカディア市ヶ谷にて開催。愛媛大学の最新の情報も頂き、年一度の総会で楽しい時間を過ごせました。



特別講演は、日本を代表する以下の先生方

愛媛大学耳鼻咽喉科 羽藤直人教授(11期生)  
「愛媛大学医学部と耳鼻咽喉科の現状50周年に向けて」

東京都健康長寿医療センター 心臓血管外科 西村隆部長(14期生)  
「重症心不全に対する挑戦 補助人工心臓を用いた治療戦略」

東京医科大学 健康増進スポーツ医学分野 浜岡隆文教授(11期生)

(文責 酒向正春)

## 第7回近畿支部総会 報告

第7回近畿支部総会が平成28年9月10日、大阪市のブリーゼプラザにて開催されました。

近畿支部は平成12年に同窓会最初の支部として発足しましたが紆余曲折あり、その後活動が停滞してしまい平成23年に再開、それからは毎年総会を開催してきております。そのため最古の支部ではありますが今年が第7回目というわけです。



今回は80名弱の参加があり、毎回会場探しに苦労するほど年々盛会となってきております。これもひとえに役員、幹事のみなさんの並々ならぬご努力のおかげと感謝しております。

今回は、社会医療法人大道会 森ノ宮病院心臓血管外科部長の加藤 雅明先生に、「大動脈疾患のカテーテル治療」と題した記念講演をしていただきました。

先生は大動脈、特に胸部大動脈瘤、大動脈解離に対してステントを使用したカテーテル治療を世界に先駆けて開発、実践してこられました。ステントの自作に始まるいろいろな苦労も含め面白く、門外漢にも分かりやすくお話して頂き、大変勉強になりました。手術しなかった時代の惨憺たる成績からすると患者さんにとってもひとつの光明となる治療と感じました。

また、毎年1名の愛媛大学卒を取って愛大同窓生の研修を受け入れ、1年間でしっかり習得させ帰しているとのことで、同窓生のはしぐれとして本当に有難いことと感謝いたしております。

講演に熱が入り少々予定時間をオーバーしましたが、引き続き懇親会に移り、乾杯の後はそれぞれ懐かしい顔、クラブの先輩後輩、また診療上のいろいろな情報交換など、あちこちに話の輪が広がっていきました。

特に今回は、耳鼻咽喉科の柳原名誉教授のご参加をいただきました。先生の若々しくお元気な姿に、特に古参の同窓生は懐かしく感激しました。

先生には愛媛大学校友会(愛媛大学全体の同窓会)近畿支部の第3回総会(今回初めて出席された由)の報告を頂きましたが、校友会の存在そのものを誰も知らなかったという状況で、今後の課題として取り組んでいく予定です。同窓会本部にも取り組みをお願いする次第です。

近畿支部は、近畿一円に居住、在職の方で構成されています。毎年多数の卒業生が近畿地方に研修医として就職してきていますが、個人情報保護の壁は厚くなかなか実態の把握が難しいところです。今回連絡の無かった方、そして同窓の情報をお持ちの方、また他地域の方でも近畿支部っておもしろそうだとお感じになった方、是非ご連絡ください。お待ちしております。

(文責 1期卒業 朴 信正 park618424@sunny.ocn.ne.jp)

## 第13回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部九州支部同窓会を7月23日ホテル日航福岡にて行いました。ご存じとは思いますが、本年4月14日と16日に熊本と大分で震度7の地震が相次いで発生しました。同窓会の中止も考えましたが、熊本や大分からの出席予定者もおられ、開催を決定させていただきました。

今回は、13名と少人数でしたが、皆元気で和気藹々とした雰囲気でした。

今回の講演は、『地域包括ケア時代の精神科病院の役割』の演題で山内勇人先生(14期生)にお願いしました。

その後、写真撮影、懇親会となり近況報告も交えながら無事同窓会は終了し、ホテル内で二次会を行い来年の再会を誓いました。

来年は平成29年7月22日(土) 18時30分よりホテル日航福岡にて開催予定です。

九州在住や九州に赴任された先生がおられましたら一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力をお願いします。

愛大の各医局の先生で九州出身の方の参加も歓迎します。また研修医で九州勤務の方も参加よろしくをお願いします。



<事務局> すみい婦人科クリニック 澄井 敬成 (8期生) sumiic@k9.dion.ne.jp  
九州支部長 角 典洋 (2期生) sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp

# 《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・ 同窓会名簿の作成
- ・ 定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・ 同窓会会費徴収のための業務
- ・ 事務連絡及び各種文書の送付
- ・ 支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

## 2. 個人情報の提供

会員から情報の照会依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承ください。

## 3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

## 《次号会報原稿募集》

### ★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
  2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
  3. 会費未納者への納入勧誘
  4. 3年に1回

### ★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

## 《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

入会金 1万円 終身会費4万円(合計5万円)

## 《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

## 《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

## お知らせ

### 第33回

### 愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成29年5月19日(金)18時～

場所：臨床第2講義室

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

## 連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

### 愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989 (受付10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp